

TOWARD THE NEXT STAGE

みんなで作る「新しい文化会館」の取組状況をお届けします

2023.06
Vol. 5

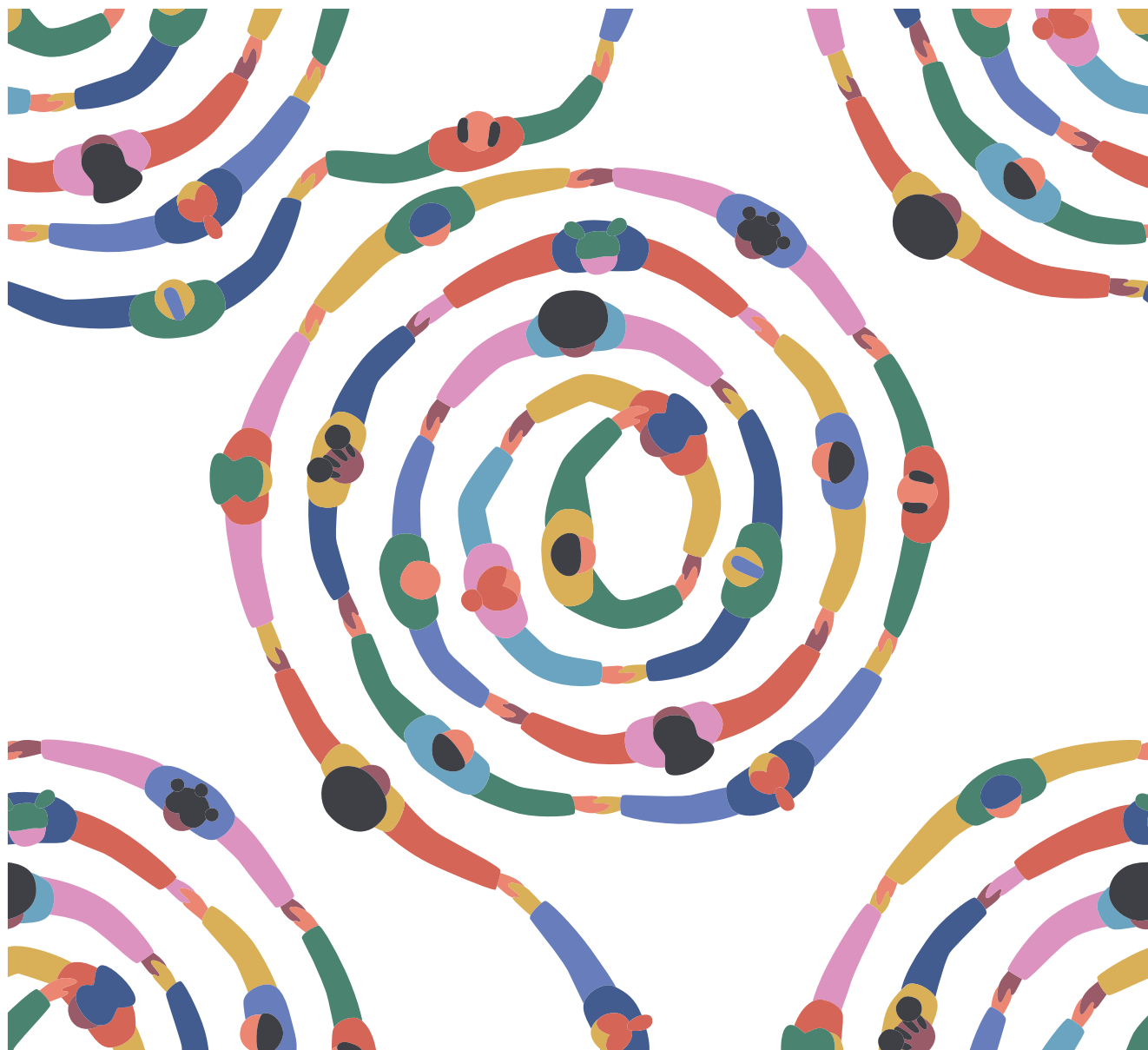
飯田文化会館

ニュースレター

TAKE FREE

第6回 飯田市新文化会館整備検討委員会

みんなが集い、創り、伝える感動の飯田ひろば





飯田らしい表現活動とは ～これまでとこれから～

はじめに、前回までにまとめられた「飯田らしい公立劇場の役割」について振り返りました。その後、検討委員会の市民委員と学識委員からの話題提供をもとに、飯田らしい表現活動とは何か、意見交換がされました。

話題提供

飯田らしい表現活動のこれまで

いいじま たけし

飯島 剛 委員

元 飯田市美術博物館 副館長
元 飯田文化会館 館長



外からの文化を 自分たちのものにしていく精神性

飯島氏は今までの経験から、「飯田下伊那には、様々な民俗芸能があり、続いている素地がある。新野の盆踊りや人形浄瑠璃、地芝居など、元々この地になかったものを暮らしの中に取り込み、必要なものとして定着させてきた。日常と文化をつなぎ、厳しい自然の中での心の豊かさと潤いを求め、続いてきた伝統がある」と振り返り、飯田発祥ではなくとも様々な文化を伝承し、取り入れていく精神性がある、と話します。

集い、つながり、広げていく 関心のない人たちにも広げる意識を

また、いいだ人形劇フェスタ(以下、フェスタ)やオーケストラと友に音楽祭(以下、オケ友)など、市民がつくり上げていく文化を通じて「『人を育てまちをつくろう』という思いが、言わなくても共有されていることが飯田らしさ」と話す一方、課題として「小さな日常を取り込んだり、人が集まりつながったりしていく時に、関心のない人たちにも広げていく意識を持たなければならないと感じる」と、話しました。

そして市内で活動する演劇集団「演劇宿」を例に挙げ、演出家などの専門家に滞在してもらい、地域を題材とした作品をつくるなどの活動を続け、広がりを見せていることを紹介したのち、「フェスタやオケ友などはまだまだ日常とつながっていないことが課題に感じる」と提起しました。

一人ひとりが文化の担い手

そんなまちになっていくことが理想

また別の視点から、「人形劇では、人形劇カーニバル飯田の時はプロ劇団と行政の連携が難しく、様々な意見がある中で紆余曲折を経て、現在のフェスタは市民が主体となって行っている。専門家の中では地域とつながるの必要性を感じている人もいて、そんな人たちの力を借りながら、これからのまちづくりに必要なことを住民や企業と共に考え、行政としても支援のあり方を考えていくことが重要」と話します。

最後に飯島氏は「人口が減る = 文化の担い手が減るということ。これからは、一人ひとりが文化の担い手として何かしら活動している。そんなまちになっていくことが理想であり、『近き者よろこび、遠き者来たる』と、表現されました。



事例から見る、これからの表現活動とは

小澤氏はプロデューサーを勤められていた上田市交流文化芸術センター(サントミュージゼ)の基本理念『人にやさしい 夢と未来を紡ぐ 創造都市うえだ』の実現」を挙げ、“ひと” “文化” “まち” “施設”の4つの育成に取り組むサントミュージゼの取り組みを紹介しました。



「人」が育つことは、「まち」が育つことへとつながる

鑑賞、創作・発表、交流を通じた様々な育成の取り組みが、市民による歴史ある伝統文化の継承や、新たな文化の創造を促し、熟成された地域文化を継承するとともに、まちのにぎわいや活力を生み出す拠点として、魅力あふれるまちづくりへの架け橋となる。

サントミュージゼの2つの柱



1 芸術家ふれあい事業 役割を重視した活動 | 地域とホールとの連携

アーティストや専門家が市民と交流し、様々な活動を生み出している事業。音楽の場合は、地域プログラム・ホールプログラム・創造プログラムによって地域とつながり、演劇などの場合は、地域資源を活用した作品をつくり、活動の様子を動画サイトで配信するなど全国展開し、市街地の活性化にもつなげている。

2 連携提携事業 大ホールの活用 | 鑑賞事業を重視した活動

オーケストラや全国の劇場、民間プロモーターと提携し、大小様々な作品を呼べるようにしている。

アウトリーチ事業 (芸術家ふれあい事業)

普段文化芸術に触れることが少ない皆さんに対し、身近なところで体験できる機会を提供することを「アウトリーチ」といいます。サントミュージゼでは、持続可能な施設の運営を図ろうと、利用者と同様に観客も増やす「創客」に向け、アウトリーチ事業に取り組んでいます。上田市教育委員

会と連携して、上田市内の小学校の教室でプロ演奏家による「クラスコンサート」を実施。また、高校演劇班(部)を対象に「実験的演劇工房」を実施し、日本を代表する劇作家や演出家を迎えて、指導を受けながら作品制作に取り組んでいます。

話題提供まとめ

佐々木宏幸 学識委員
明治大学教授



両氏の話題提供を受け、佐々木氏は自身の解釈として「飯田市のこれまでとこれからの2つの視点から見た時、すでに飯田市は時代の先端を行っていた」とし、飯田らしさを3つのポイントにまとめました。

佐々木氏は「飯田の様々な活動が上田市の事例と同様に、地域からの発信、地域のマネジメント、普及活動などが市民によって行われてきたと感じる。『アートを起点としたイノベーション、文化政策はもはや芸術文化のためだけのものではない』といったこの時代の文化に対するニーズが、すでに飯田で展開されている。このような文化を今後どう広げていくかという視点を持ち、住民・企業・行政で支え合うことが非常に重要」と話し、芸術性と社会的役割は自分たちで設定しなければならない=飯田らしい表現活動・文化活動を設定することの必要性を投げかけました。

飯田らしさ 1

外からの文化の吸収と展開してきた背景

飯田らしさ 2

日常と文化とのつながり

飯田らしさ 3

専門家とのつながり

飯田らしい表現活動とは？

話題提供から見えてきた「飯田らしさ」「ありのままの飯田の芸術性・社会的役割」について、委員が5つの班に分かれて、具体的に議論を深めました。

ムトス精神の根付きを飯田らしさに（1班）

飯田市は外からの文化を取り入れ、自分たちなりに工夫し守りながら付加価値をつけ、発信することを大事にしてきた。リニアが来て都会との距離や時間の短縮になることで、大きなものがたくさん入ってくる。それでも飯田のスタイルは維持され、文化は継承されていくのではないかと感じる。ムトスの精神が根付いていることが、飯田らしさにつながるのではと感じる。

地域内外の専門家とのつながりを（2班）

飯田の文化は全国でも先端を走り、県外・海外から移住し飯田を拠点に世界で活躍するプロがいることも、飯田らしさと感じる。一方、文化芸術に携わりレベルアップを求める人は飯田を出て、学び、戻ってくることもある。今後はリニアの駅も活用し、専門家やプロの方との交流の機会をつくり、レベルアップの橋渡しをすることが新文化会館の役割になってくれたら良い。

バランスを保ちながら実を大きく（3班）

市民の意見や思いを、すべて受け入れてしまっても偏りが出てしまうので、意見を聞きながらも、地域性を大事にしてバランスをとることが大切。小澤氏の「公共のものは作るものではなく、実になっていくもの」という言葉に共感。市民の意見を聞きながら、一つひとつ、実を大きくしていくことが大切。

民間主体の活動を、行政が支える（4班）

人形劇を振り返ると、人形劇カーニバルは行政主導で20年、現在のフェスタは民間が主導。民間主導でも行政のバックアップがあったから続いているが、やはり行政が前へ出ていたら文化は育っていかないと感じる。

自然と足を運びたくなる文化会館へ（5班）

文化とは遊びからきている。落語、浄瑠璃、歌舞伎もそう。新文化会館は、楽しく遊べて自然と人が集まる、そんな場所であってほしい。

昔はすごい人がいた。カリスマおじさん・おばさんがいて、人が集まり文化が育まれる。人を育てることが大事。

